

次々と明らかになる電力会社の事故隠しやデータ改ざん。日常的に行われる不正行為は電力会社のモラルの問題にとどまらない。志賀原発の臨界事故公表に始まった国内原発の一連の制御棒落下事故は、我々がチェルノブイリ事故と隣り合わせだったことを明らかにした。意図しない制御棒の落下、効かない安全装置、間違った手順書、こうした全てはチェルノブイリ事故にそっくりだ。真夜中の午前 2 時という時間帯まで……。隠蔽された原発臨界事故の後に東海村の核燃料施設（JCO）で臨界事故が起き、2 名が死亡した。

● 続発した制御棒の落下

99 年に起きた志賀原発の臨界事故の公表が発端で明らかになった国内原発の制御棒落下事故は、78 年東京電力福島第一 3 号、88 年東北電力女川 1 号、91 年中部電力浜岡 3 号、93 年東京電力福島第二 3 号、98 年東京電力福島第一 4 号、99 年志賀原発 1 号、2000 年東京電力柏崎刈羽 1 号、と驚くべき頻度で起こっている実態が明らかになった。

制御棒は原発のブレーキである。ブレーキの操作ミスで臨界状態が続いた志賀原発 1 号は 15 分間、福島第一 3 号は 7 時間半、全く制御不能状態での核分裂反応が続いた。他の原発も臨界に至らなかったのは全くの偶然であり、どの事故もチェルノブイリのような重大事故に発展する危険性があった。

● 電力会社の鈍感と隠蔽体質が真の原因

日本を破滅させたかもしれないこれらの事故の真の原因は、原発の構造欠陥に加えて、電力各社の原発事故に対する救いがたい鈍感さと隠蔽体質である。志賀原発での臨界事故が明らかにならなければ、他の原発での臨界や制御棒落下事故は公表されなかった。臨界は事故だが、制御棒落下は事故じゃなく報告義務がない、これが電力会社の見解である。これは驚くべき鈍感だ。ブレーキが効かなければ何時重大事故に発展するかも知れない。そうした認識が彼らに

全く無いことが、今回の一連の事故隠しで明らかになった。中部電力の担当幹部は「私個人はこの制御棒落下を公表する必要は無いと思う」とうそぶいた。結果が重大でなければ黙っていれば良い、それが電力会社の本音だ。そんな体質が、東京電力を臨界事故でさえも 30 年間隠し続けさせたのだ。

● 明らかになった原発の構造欠陥

今回の事故は全て沸騰水型（BWR）と呼ばれる原発で起きている。一連の事故は、98 年の福島第一 4 号機事故を除いて、全て制御棒駆動装置の水圧を調節する弁の誤操作が原因である。BWR は制御棒を圧力容器の下から水圧で押し込む、という共通点がある。このことは、水路の弁の開閉を間違えれば、制御棒が落下する危険性があることを示す。しかし、定期点中のこれらの弁の操作について、日立や東芝ら原発メーカーは手順書に記載していなかった。操作は現場作業員の一存で行われていた、という。志賀原発では、制御棒落下で臨界の際に働かずに緊急停止装置が作動できなかった、といわれる。しかし、中部電力浜岡の場合、弁の操作の間違いの結果、万一緊急停止装置が働けば、制御棒は更に大きく落下する恐れがあった。我々は、構造欠陥を抱えた原発の運転を無知な電力社員に任せているのだ。（河田）